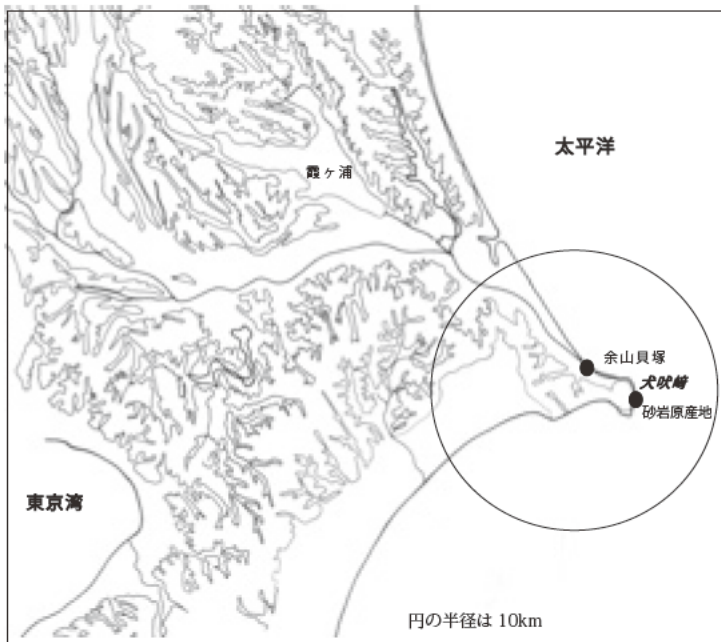


第2節 遺跡の立地と特徴

余山貝塚は、現利根川下流域の微高地上に立地する遺跡であり、標高は5 mを測る。利根川のそそぐ太平洋からは5 kmほど利根川を遡った位置にあり、現時点では利根川最下流域の縄文遺跡である。

これまでに検出された遺構は砂層上に形成されており、基盤層にローム層は確認されていないため、砂帯上に形成された遺跡と考えることができる。遺跡の西側には高谷川が流れ、現利根川へと連絡している。余山貝塚と現利根川との間の低地にも後・晩期の遺物を出土する遺跡が存在するとい



第1図 余山貝塚の位置

うが、詳細は不明である [石橋 2000]。遺跡は明治時代より数多くの発掘が繰り返され、また完形の土器や骨角器・貝輪などが多数出土したため、遠隔地からも多くの好事家が訪れ、繰り返し遺物採集のための乱掘が繰り返され、そのためにとくに貝塚部分はその大半が乱掘され、失われたらしい。

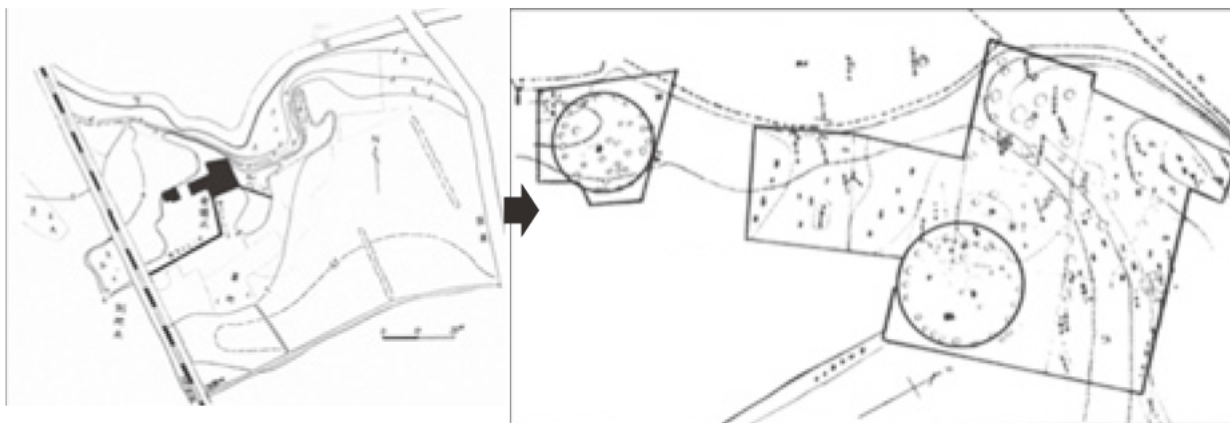
調査歴が古いため、報告例も限定的で貝層の広がりや遺構群との関係など、遺跡の全貌についても不明な点が多いが、その中でも数少ない報告である東京大学人類学教室の酒詰仲男らの記録から大まかな様相を知ることができる。当時の発掘は主に貝層中からの遺物採取にあったため、発掘は貝層部分に集

中しておこなわれたらしく、また発掘は貝層の下面までで終わることが多かったようである。また調査地点は人骨の収集が目的であったため、高島の調査地点の周辺が候補地とされたが、地形の改変が大きく正確な場所は特定されていない [酒詰 1963]。

本報告で取り扱う余山貝塚の出土遺物は高島唯峰の調査資料で、土器や石器以外に大量の骨角貝器が採集され、また人骨の発見もある。しかし、遺物の採集が目的の発掘であったため、住居址などの集落遺構の存在は不明なままであったが、東京大学の調査はその不足を補う情報を提供してくれている。酒詰らによっておこなわれた発掘で貝層下面の砂地の基盤層上において住居跡を検出しており、本来は貝層下には集落遺構が遺存したことがはじめて明らかにされた。

さらにまた、1959年（昭和34）に大場磐雄らによって実施された調査によっても貝層下から炉跡や住居跡が発見されたため、貝層の分布と集落の広がりはおおむね一致した広がりを示すことがわかってきた（銚子市教育委員会 2001）。貝層は遺跡の西側を流れる高谷川によって開削された台地の西側斜面からJR線の線路を跨いで南側を巡る広がりをもつ。また東側にも面的に貝層が広がる部分があり、その範囲は東西100 m×南北150 m余りを測る。

また、高谷川の河川改修工事によって行われた調査では、河川に面した斜面部分から後期後葉より晩期後半にいたる時期の遺物が集中して発見されている [石橋 前掲]。しかし晩期後半の時期に貝塚が形成されたか否か、興味をもたれるが現時点では不明である。台地上には当該期の土器片が若干散



第2図 余山貝塚の地形と東京大学の調査区〔酒詰 1963〕（右図の正門は住居）

布しているが、包含層の最上部に相当するため、存在したとしても今日では確認することはできないのかもしれない。

これまでの断片的な調査を総合すると、遺跡は高谷川によって分断された砂帯上に形成され、形成時期は出土遺物から堀之内2式期から荒海式期と長期にわたる継続期間をもつ遺跡であったことがわかる。当該地域において後晩期の中核的な集落遺跡と考えることができるであろう。そしてその形成時期の主体は、出土遺物から見る限り、後期中葉から晩期前半と考えることができる。

下郷コレクションの資料群との関係から注目されるのは、茨城県の南部に位置する椎塚貝塚や福田貝塚であろう。ともに高島による大々的な発掘が行われ、こと土器や土偶などの土製品において見るべきものが多いが、後期前葉から晩期前葉にいたる継続期間や貝塚形成、釣針や銚頭などを主体にして構成される骨角器の組成などに多くの共通点を見出すことができる。これらは単なる遺物採集活動の偶然性だけでなく、利根川下流域を含む古鬼怒湾沿岸の先史地域社会の実像の一端を映しているといえる。

（阿部芳郎）

【引用・参考文献】

石橋宏克 2000「余山貝塚」『千葉県の歴史 資料編 考古1（旧石器・縄文時代）』、財団法人千葉県史料研究財団；pp.836-843

酒詰仲男 1963「千葉県銚子市余山貝塚発掘調査概報（中篇）」『文化学年報』第12輯，同志社大学文化学会；pp.125-145